氏　　　名　山田圭二郎（やまだけいじろう）
学位(専攻分野)　博　士（工　学）
学位記番号　論 工 博 第 3642 号
学位授与の日付　平 成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件　学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目　地形文脈における敷地マネジメントに関する景観論的研究

論文調査委員　（主 査）教 授 中 村 良 夫　教 授 飯 田 恭 敬　教 授 髙 橋 康 夫

論　文　内　容　の　要　旨

都市デザインにおいて，地形やインフラストラクチュアなどの大文脈と建築単体との媒介的分節体として，「敷地」という中間的な都市単位が重要である。本論文は，京都盆地周縁部に焦点を当て，都市空間の基本単位としての「敷地」について，その占地選好論，敷地造成および構成論，敷地に関わる認識論等の課題とその相互関係を，地形という一貫した文脈のもとに景観論的見地から実証的に体系化した成果をまとめたものであって，6章からなっている。

第1章は序論であり，本研究の背景，既往研究と本研究の位置付け，研究の目的および研究の構成を述べている。

第2章では，地形に対する認識体系としての地名のうち，特に山裾に多く分布する地名として，京都盆地および山科盆地周縁部から48の「野」地名を収集し，地形学的観点および地名語源学的観点からその微地形構造を分析している。それにより，野地名は段丘および急傾斜扇状地に分布すること，野地形の形態的特徴として，特に，舌状段丘型の微地形構造を有するものが多いことを明らかにしている。また，敷地の基盤となる山裾の地形認識構造を，「山—野—里」の三項構造モデルとして示している。

第3章では，京都盆地山裾に立地する寺院敷地を取り上げ，段丘，扇状地，崖錐などの地形学的見地から，その占地特性を明らかにしている。その中で，山からやや離れた段丘面に占地し，山の稜線の見えを重視する，という共通の占地選好を有する平安期別業起源の寺院敷地につき，占地地形環境の詳細な分析により，その地形的特徴およびそれに起因する景観的特徴を明らかにするとともに，その占地選好に影響したと考えられる宗教的・社会的時代背景として，平安期から鎌倉期に勃興した西方浄土思想や阿弥陀来迎思想など浄土教の影響を指摘している。さらに，占地地形環境に強く依存する敷地領域形成について，敷地を囲繞する山地地形が明瞭な敷地領域を規定する構造型領域形成と，敷地からやや離れた地形が視覚的にその輪郭を形づくる対面借景，造境型借景，遠借景などの非限定輪郭型領域形成とに類型化されることを示すとともに，参道形成，高低差と奥行きの演出，庭園利用，見晴らし場の形成などの微地形利用とその景観演出効果を，占地特性との関連から系統的に明らかにしている。

第4章では，敷地構成を多層的に認識・把握するためのモデルとして，敷地の骨格を形成する地形，平場，建築，道，水の5要素を基本構成要素とする「多層認識モデル」を提示している。それに基づき，「境界相」，「領域相」という概念により総括される敷地の諸要素を，基本構成要素の相関関係として系統的に説明し得ることを明らかにし，このモデルの有効性を実証している。また，敷地造成に伴うマネジメントとして，結界，石段，建築，斜面庭園などによる高低差マネジメントおよび水系マネジメントの重要性を指摘し，その具体的マネジメント手法および景観演出効果を実証的に示しながら体系化している。さらに，敷地構成要素のデザインサーベイに基づく意匠データの分析により，敷地の統辞構造を明らかにし，敷地の統辞原理として，「道」と「結界」が基本的であることを実証している。

第5章では，景観認識の行動論的データおよび地誌メディアの分析により，景観認識の多元的生成および連想プロセスがハイパーテキスト構造を有することを明らかにしている。また，原自然から座辺の自然に到る系列を「人間—自然系の間の構造」として，身体を基準とする階層モデルにより示し得ることを論証している。また，敷地構成要素の記号論的分析の結

果，占地環境から敷地内部，庭園に到る各空間の景観特性が「山—里」の両義的差異の入れ子構造によって体系的に捉えられることを明らかにしている。

第6章は結論であり，本論文で得られた研究成果を要約し，地形文脈のもとに都市空間を体系的に捉える基本単位としての「敷地」の有効性を総括的に論証している。

論文審査の結果の要旨

本論文は，都市デザインの基本単位としての「敷地」の重要性に着目し，京都盆地周縁部におけるその占地選好論，造成および構成論，認識論等の課題とその相互関係を，地形という一貫した文脈のもとに景観論的見地から実証的に研究した成果を体系化したものであり，得られた主な成果は次のとおりである。

1．敷地の基盤となる山裾の微地形構造とその認識構造に関連する地名として，「野」地名を京都盆地周縁部から収集し，地形学的観点および地名語源学的観点に基づく分析により，その形態的特徴を明らかにするとともに，山裾の地形認識構造を「山—野—里」の三項構造モデルとして示した。

2．京都盆地山裾に立地する寺院敷地の地形学的占地特性の詳細な分析により，その地形的特徴およびそれに起因する景観的特徴を明らかにするとともに，その中で共通の占地選好を有する平安期別業起源の寺院敷地につき，占地選好に影響したと考えられる宗教的・社会的時代背景を指摘した。また，占地に強く依存する微地形の景観演出効果を系統的に整理した。

3．敷地構成を多層的に認識・把握するためのモデルとして，敷地の骨格を形成する5要素を基本構成要素とする「多層認識モデル」を提示した。それに基づき，「境界相」，「領域相」という概念により総括される敷地の諸要素を，基本構成要素の相関関係として系統的に説明し得ることを明らかにし，このモデルの有効性を実証した。

4．景観認識の行動論的データおよび地誌メディアの分析により，景観認識の多元的生成および連想プロセスがハイパーテキスト構造を有することを明らかにした。また，原自然から座辺の自然に到る系列を「人間—自然系の間の構造」として，身体を基準とする階層モデルにより示し得ることを論証した。また，敷地構成要素の記号論的分析の結果，占地環境から敷地内部，庭園に到る各空間の景観特性が「山一里」の両義的差異の入れ子構造によって体系的に捉えられることを示した。

以上を要するに，本論文は京都盆地周縁部における多数の古典的敷地の詳細な実証分析を通じてその空間構造を明らかにするとともに，都市デザインの方法論に新しい次元を拓いており，その成果は学術上，実際上寄与するところが少なくない。よって，本論文は博士（工学）の学術論文として価値あるものと認める。また，平成14年1月25日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。